

平成 29 年度 JACET 中国・四国支部

春季研究大会プログラム&発表要旨

日時：6月3日（土）12:30 から受付

場所：岡山大学教育学部（〒700-8530 岡山市北区津島中3丁目1番1号）

12:30 ～ 受付

13:00 ～ 13:20 支部総会（5101教室）

司会 三宅 美鈴（広島国際大学）

13:20 ～ 13:25 開会式

開会の辞

支部長 松岡 博信（安田女子大学）

大会実行委員長 小山 尚史（岡山大学）

第1室（5208教室）

司会：折本 素（愛媛大学）

発表1：高大接続・英語4技能評価の時代に向け地域公立高校の可能性と課題ー英語コミュニケーションテストOPIC適用結果を通じての考察ー（13:30-14:00）

八木 智裕（一般社団法人 Global8）

発表2：「観光英語」の課外授業の開発とその実践

（14:05-14:35）

中山 晃（愛媛大学）

寺島 健史（松山大学）

川畑 由美子（河原学園）

司会：池野 修（愛媛大学）

発表3：高等学校英語教科書の改訂による英文法例文の変化に関する研究

ー新 JACET8000・CEFR-J Wordlist Ver.3.1 を用いてー

（14:40-15:10）

中住 幸治（香川大学）

発表4：海事英語の漫画教材の開発とその CLIL 授業での実践

（15:15-15:45）

二五 義博（海上保安大学校）

第2室（5206教室）

司会：上西 幸治（広島大学）

発表1：英語学習者による前置詞“by”のエラーに関する言語学的予備調査

（13:30-14:00）

西谷 工平（就実大学）

中崎 崇（就実大学）

発表 2 : 英語の発音や語彙の教え方に関して役立つヒントについて (14:05-14:35)
田淵 博文 (就実大学)

司会 : 高橋 俊章 (山口大学)

発表 3 : Nathaniel Hawthorne の *Young Goodman Brown* における
プロットの展開とその文体論的特徴 (14:40-15:10)

藤居 真路 (広島県立尾道商業高等学校)

発表 4 : 日本人学生のメタ認知読解方略使用と英文読解力の関係 (15:15-15:45)
Magee Glenn Amon (愛媛大学)

(休憩 : 15:45-16:00)

講演 (5206 教室) (16 : 00~17 : 30) 司会 : 田淵 博文 (就実大学)

「会話の英語—学び方と教え方」 講師 : 豊田 昌倫 (京都大学名誉教授)

17:30 - 17:35 閉会式
閉会の辞 副支部長 岩井 千秋 (広島市立大学)

研究発表要旨

第1室

発表1：高大接続・英語4技能評価の時代に向け地域公立高校の可能性と課題

－英語コミュニケーションテストOPIc適用結果を通じた考察－

発表者：八木 智裕（一般社団法人Global8）

中央教育審議会では、平成26年12月22日の第96回総会において、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(答申)」を取りまとめた中で、国際共通語である英語について、4技能を総合的に育成・評価することが重要と纏めた。そのような状況下、2015年6月6日、中四国支部春季研究大会で「大学におけるOPIc (Oral Proficiency Interview by computer) の活用シーンと英語コミュニケーションスキルの実態」を発表させて頂いたのを契機に、中四国地域における大学・高校で幾つかの適用機会を得た。その中で、香川県教育委員会のご理解・ご支援のもと実施した同県下公立高校における、英語コミュニケーションテストOPIc オンサイト実施（学校ICT設備を活用したCBT）を通じて可視化出来た現状、可能性と課題に関して考察を試みる。又、限られた事例ではあるが地域特性を踏まえた課題解決の可能性につき提言を行いたい。

発表2：「観光英語」の課外授業の開発とその実践

発表者：中山 晃（愛媛大学）

寺島 健史（松山大学）

川畑 由美子（河原学園）

わが国のように英語を学ぶ目的が希薄となりがちな「外国語としての英語学習環境」において、明確な目的と使用場面を設定したプロジェクト型の英語学習は、グローバル人材育成の一側面となる語学力の向上に期待できる教育的手法であると考え、松山市及び石鎚山周辺など観光資源が豊富な愛媛県をフィールドとして、愛媛大学及び松山大学の両大学の59名の学生（愛媛大学から17名、松山大学から42名）に、実践的な英語使用の機会を提供し、将来のキャリア意識を向上させることを試みた。具体的には、観光英語に関する事前講座を前期に4回、後期当初に2回（計6回）を実施し、さらに実地訓練の場として、平成28年度中に開催された日米教育養成協議会（JUSTEC2016）の会期中（平成28年11月4～7日）に設定されている各種オプション・ツアー（初日は松山城観光、最終日は石鎚山周辺観光）に両大学の学生を英語ガイドとして同行させ、特に海外からの参加者への愛媛県内の観光名所の案内を担当させることにした。実践のまとめとして学生からの参加報告では、彼らが、一連の課外講座への受講とロールプレイへの参加、さらに実際に外国人旅行者を相手に、ほぼ1対1でのボランティア英語ガイドを経験したことで、英語学習へのさらなる意欲を持つことができたという感想や、将来、愛媛県内の観光資源の海外への発信に貢献したいといった趣旨の感想が得られた。今後の課題として、正課化やフィールドの四国拡大等があげられる。

発表3：高等学校英語教科書の改訂による英文法例文の変化に関する研究

－新 JACET8000・CEFR-J Wordlist Ver.3.1 を用いて－

発表者：中住 幸治（香川大学）

本研究の目的は、大学教育を受ける前段階である高等学校において使用されている英語検定教科書の（一部）改訂に伴う英文法指導事項や例文法例文の変化について検討することにある。分析対象は「コミュニケーション英語 I」の初版・改訂版である。分析に先立ち、教科書を難易度に応じて難・中・易レベルに分類し、それぞれのレベルより採択数を基準とした各上位4冊×3レベル、さらにそれらの初版・改訂版計24冊を研究対象とした。そこから英文法例文を抽出してデータベース化し、比較・検討を行った。分析においては、カイ2乗検定・残差分析等を行うとともに、語彙レベルの検討のために新 JACET8000 と CEFR-J Wordlist Ver. 3.1 という二つの語彙コーパスを利用した。その結果、1) 教科書の改訂に伴う英文法例文の変化については教科書によって対応がかなり異なっていること、2) 掲載文法事項には大きな変化は見られなかった、3) 語彙レベルが必ずしも教科書のレベルに対応していない場合があること、等が分かった。また、新 JACET8000 と CEFR-J Wordlist Ver. 3.1 で提示された語彙レベルに違いが見られ、テキストの語彙レベルを検討するには複数の語彙コーパスを使用する必要があることも示唆された。

発表4：海事英語の漫画教材の開発とその CLIL 授業での実践

発表者：二五 義博（海上保安大学校）

海上保安大学校においては、卒業後にほぼ全員が海上保安業務に従事するという特殊性もあり、3・4年生では海事英語の習得を中心とした英語の授業を既に行っている。しかし、近年、海上保安業務（外国船との無線通信、立入検査、外国人の救助や取調べ等）の国際化に伴い、早くから業務の主要場面での英語使用に慣れておく必要性から、2016年度より1・2年生も一般英語の学習と並行して海事英語に一部触れることとなった。その際、海上保安庁では多様化する事案への的確な判断力や思考力、および危機状況に対してのチームとしての協力が求められているため、「内容」と「言語」を統合的に学ぶのに加え、「思考」や「協学」の要素も重要視する CLIL を活用することにした。低学年への CLIL 授業導入で留意した点は、専門用語で難解になりがちな授業内容に対し、いかに理解を高めるための足場を作るかであったが、本授業では視覚や身体も生かしながら専門的内容を学習できる漫画教材を取り入れた。

本研究では、まず、イラスト部分では絵の得意な上級生、専門知識では海事関係の教員の協力の下、英語使用の場面別に7つの漫画教材を開発した。次に、2016年度では1・2学年2クラス計40名を対象にして、そのうち3つの漫画に基づく CLIL 授業を試行した。具体的には、CLIL の4Cにしたがって、「内容」では救助や船舶避航などのオーセンティックなテーマ、「言語」では航海・機関・通信の専門用語を用いるコミュニケーション、「思考」では場面の予測や問題への対処法、「協学」ではロールプレイ等に関する活動をデザインし、学習者主体の質の高い学びを目指した。そして授業後には、学習者の反応を見るため、選択式（5点法）と自由記述式を併用したアンケート調査を実施した。研究結果、海事英語の漫画教材による CLIL 授業の利点や課題がいくつか明らかになったが、その詳細は当日の発表で紹介する。

第2室

発表1： 英語学習者による前置詞“by”のエラーに関する言語学的予備調査

発表者：西谷 工平（就実大学）

中崎 崇（就実大学）

本研究の目的は、日本人大学生による英語の前置詞“by”のエラーに着目し、そこに内在すると考えられる過剰な意味拡張の実態とその要因を言語学的観点から明らかにすることにある。当該の学生の指導に当たる外国人教員から、“... by fine weather, it was very hot ...” や “... a friend of mine caught a starfish by his hand!” など、他の前置詞が使用されるべき文脈で“by”が使用されるケースが報告されている。これらのエラーは、英語学習における初出の“by”の意味が中心義として定着し、それと翻訳対応関係にある日本語の格助詞（たとえば「で」）の多義性に基ついて“by”の意味が過剰拡張することにより生じたと推測される。日本語と中国語（L1）の特性が英語（L2）の前置詞のエラーを異なる方法で生み出す可能性は、たとえば Mochizuki and Newbery-Payton（2016）でも指摘されているが、本研究ではとくに前置詞“by”のエラーに焦点を絞り、英語学と日本語学の観点から精密な分析を試みる。それを踏まえて、この種のエラーを予防するためには、英語教育において専ら英語だけに集中させるのではなく、日本語の知識を活性化させ、それを引き合いに出すような指導も必要であることを論じる。

発表2：英語の発音や語彙の教え方に関して役立つヒントについて

発表者：田淵 博文（就実大学）

大学で英語音声学を教えて30年以上になる。英文科の学生でも近年は英語音声学やドイツ語などを履修することなく卒業していく学生が多いのが現状である。

この研究発表では、主に発音と語彙に的を絞り、英語教師として学生にいかに関わるべきかと言う方法論について考えてみたい。平素の授業をとおして、学生の間違った発音などを随時メモしていたが、なぜそのような誤った発音をするのかということに関しても、学生の立場になって考えてみたい。

まず学生が辞書を引く場合を考えてみよう。殆ど多くの学生が紙媒体の辞書でなく電子辞書を使用しているのではなかろうか。そして単語の意味だけを調べて、発音記号をないがしろにしたがり、弱形や強形の発音の違いなどを詳しく見ていないのが実情ではなかろうか。

今回の研究発表では、イギリス英語の発音や語彙を中心に引き上げ、アメリカ英語との比較をとおして学習者の興味を喚起させたい。

また、欧米の新聞、雑誌などでよく見かける生活語彙や短く簡略化した単語の例やイギリスの若者の特徴である発音の簡略化の例や日本語の干渉によって引き起こされる注意すべき発音の例などを引き上げ、参加者の先生方と一緒に、発音や語彙の指導や役に立つ教授法について考えてみたい。

発表3 : Nathaniel Hawthorne の *Young Goodman Brown* におけるプロットの展開とその文体論的特徴

発表者 : 藤居 真路 (広島県立尾道商業高等学校)

文体論は、文学作品の特徴を客観的に解明することができる方法の1つであり、文体論を基にして得られた情報は、文学的素養が十分に身につけていない学習者に、客観的な資料として提供することができると考えられる。そのため、文体論に基づく情報は、学習者が適切に文学作品を解釈したり、その作品の主題を理解したりするために役立つことができると考えられる。本発表では、Nathaniel Hawthorne の *Young Goodman Brown* を取り上げて、文体論に基づいて探求する。本作品は、藤居 (2016) が用いた段落で分けると、28 段落から構成されている。作品の中で使われている単語の中から、代名詞に加えて、信仰と邪悪、人と教会に関連している単語を選び、合計して 80 語を選定した。その英単語を用いて、潜在する因子を抽出し、プロットの展開を解釈しようと試みた。また、コレスポネンス分析によって、本作品の主題を、段落の位置関係とともに、図式的に説明することを試みた。さらに、段落の展開において、Nathaniel Hawthorne が巧みに色を使って演出していることを説明することを試みた。こうしたことを通して、Nathaniel Hawthorne が本作品を通してどのようなことを主張したかったのか探求したいと考えている。

発表4 : 日本人学生のメタ認知読解方略使用と英文読解力の関係

発表者 : Magee Glenn Amon (愛媛大学)

This study investigated the relationship between students' metacognitive awareness of strategies used when reading in a foreign language, and reading comprehension. A 30-item survey, "Scale of Reading Strategies" (SORS), and the Global Test of English Communication (GTEC) were administered to 110 first-year university students at the beginning of a 15-class general education course for reading. Results were analysed using exploratory factor analysis. Data arising from the analysis will be presented.

岡山大学へのアクセス

お車でお越しの方は、岡山大学津島キャンパスの駐車場がご利用になれますが、駐車場は有料となっておりますので、ご了承ください。(入構から1時間までは無料。1時間以上2時間未満は200円、以後1時間経過毎に200円を加算し、24時間ごとの最高限度額は1,000円です。

岡山大学はキャンパス内全面禁煙となっております。建物内だけでなく、屋外も含め学内は禁煙です。ご協力をよろしくお願いいたします。

